

学園協運動への不当介入は許さない！

学園協
報告

日刊 勤労千葉

82.6.22

No. 1076

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五～六（公衆）〇三三（22）七二〇七

マル生的攻撃をはね返した学園協のたたかい

千葉鉄道学園当局は、この間、マル生的学園支配、マル生教育を狙って、勤労千葉学園協の仲間に対する極めて悪質なドウ喝・不当介入をおこなっている。「朝の体操に参加しなかった」という理由をもって仲間の一人に対して、欠席簿を書かせ、あるいはこの間、各職場で展示してきた、ヒロシマ・ナガサキの被爆パネル展に対しても「他の職場がどうであろうと学園だけは絶対に認めない」「今度やれば現認する」「学園の管理者はオレだ」だからオレの家と同じだ。他人の家をよごしていいのか」「退学処分になる」等々と、まさにマル生そのものの論理をもって処分や退学・欠勤扱いでドウ喝し、専制的学園支配をしようとしているのである。

しかも、四月には、ビラはがしへの学園協の仲間の抗議闘争に対し局課員や公安官数十名を学園に導入し、そのことに対する更に徹底した抗議の前に謝罪せざるを得なくなった舌の根も乾かないうちに再び弾圧にできたことを断じて許すことができない。特に現在、本科生が卒業後、学園協が、今年四月に入社した新組合員だけになっていることをいいことに、今回のようなドウ喝をもって学園協運動を押しこもろうとしてきたのだ。

その意味からも手口は、極めて卑劣極まりないのである。

若い仲間たちが反撃に たちあがる

こうした反動的学園支配の狙いに対して学園協の若い仲間たちは、全力で反撃にたちあがり、今、学園当局を決定的においつめている。

六月十四日、昼休み、「話し合いたいことがある」と園長、教頭に申し入れ、しかし、園長、教頭は、口々に「何んのことかしらねいが話し合う必要はない」「生徒とは話し合うが組合と話す必要はない」「ここ（園長室）に来ては私はいないぞ」と、事務室に逃げ込んでしまった。そして、昼休みと授業終了後にも及んだ学園協全員との話し合いにも学園当局はいなおりと逃げをきめこむばかりであった。「何んで戦争や核に反対するパネル展がいけないのか」との追及に対して、何んと、「戦争反対とか賛成とか、そんなことは関係ない！」「何んといおうと学園では一切やらせない」「退学以上の処分になる」「欠席簿も八分遅刻したから書かせた。実際には欠勤扱いにはしていないから正しい扱いだ。今後もちょうする」等々、断じて許すことのできない発言をおこなった。

とりわけ、昼休みの事務室における追及行動に対しては、授業開始のチャイムが鳴なり、やおら教頭が立ち上り、「誰か現認しなさい！現認しなさい！

」とわめきたてる。（もちろん職制は誰一人動こうとしない）など、まさに今の学園当局のマル生的姿勢を鮮明にしたのである。

学園当局が非を認め、 謝罪する

しかし、学園当局は、どのようなドウ喝の前にも揺がない学園協の仲間の毅然たる態度と団結の前に、十六日には、勤労千葉本部役員も加わった席上(1)欠席簿の扱いについては未消する。今後このようなことはおこなわない。(2)おどしやドウ喝をもって学園協運動を押し込むようなことはしない。(3)以上のことを全体の前で学園長が責任をもって謝罪することを確認し、つづいて、翌日、パネル展については、そのために教室を一つ貸すことを確認した。

ガンバレ学園協の 若い仲間たち

その後、園長が全体の前のべたことは、「この前の件は欠勤になっていないから心配しないように……それから今後遅刻しないように」とひとこといって逃げかえってしまうなど、「確認」とはほどとおいものであった。

しかし、このような姑息なやり方は、学園当局の追いつめられた心情を示すばかりである。断じて学園協運動を圧殺することなどできないのだ。全支部の力で学園協の若い仲間を応援しよう。ガンバレ学園協！

「労戦右翼再編反対・闘う総評の 再生をめざす大集会」

日時 六月二十四日 十八時
場所 東京・千代田公会堂